

循環器内科医を目指す女性医師に期待する

池田宇一(信州大学大学院医学系研究科循環器病態学)

昨今、わが国では医療崩壊が指摘され、とりわけ勤務医不足は深刻な問題になっている。そうした中、今後、女性医師がますます増えてくる現状において、循環器診療でも女性医師の確保は重要な課題となる。

女子医学生からは、「循環器内科には大変興味があるが、女性はやっつけていけるか」とよく質問される。学生時代には循環器内科に大いに興味を示してくれた彼女らも、2年間の初期臨床研修が終わるころには、麻酔科、放射線科、眼科などを選択するケースが多い。現在、日本循環器学会の20～30歳代の会員に占める女性医師の割合は約20%で、医師総数における比率と比較しても決して少なくないが、新臨床研修制度のもと、今後、循環器内科を選択する女性医師が激減しないかと心配である。

女性医師に安心して循環器内科医を目指してもらうためには、どのような取り組みが必要であろうか。循環器疾患は緊急性が高い症例が多いだけでなく、昼夜を問わずintensive careを必要とする重症例が存在し、勤務も厳しいものとなりやすい。その中で、勤務条件の改善、例えば「長時間働くことをいとわないことが美德」といった意識も変えていかなくてはならない。夕方から夜にかけてのカンファランスなど、医局行事の時間設定が家庭と両立しない点も改善すべきであろう。女性医師の働きやすい環境を作ること、男性医師の負担を減らすことにもつながる。

また女性医師にとっては、心血管造影検査におけ

る放射線被曝も重要かつ避けて通れない問題である。循環器疾患の主要課題が虚血性心疾患となった現在、循環器内科医として一度は経験が必要である。いつ、どのような形で訓練を受けるかに関しては、本人の希望に対して配偶者、上司などが十分に相談に乗る体制が欠かせない。一方、循環器医療はintensiveやinvasiveな分野のみならず、慢性期医療・予防医療など幅広い分野があり、女性医師もnon-invasive cardiologistとして生涯にわたり活躍できることを学生や研修医にアピールする必要がある。

循環器内科医に限ったことではないが、女性医師にとって最も問題なのは、出産や育児のため、場合によっては一時期仕事から離れざるを得ないことであろう。ちょうどその時期は、医師としての専門性が身につくころなので残念なことではあるが、子どもが小さいうちは母親としての時間が不可欠であり、家庭の状況によっては育児と医療の両立はなかなか難しい。しかしその間は、大学院へ入学し基礎医学を学んだり、育児期間をむしろ医師としての幅を広げるチャンスにすることもできる。育児は社会的にも極めて大切なことであるし、その経験は医師としてのキャリアに大きなプラスとなる。

女性医師の問題は個人の努力だけで解決できるものではない。組織的改善、あるいは制度的なバックアップで、女性医師が勤務をしやすい環境が整えば、社会にとっても大きな利益となる。